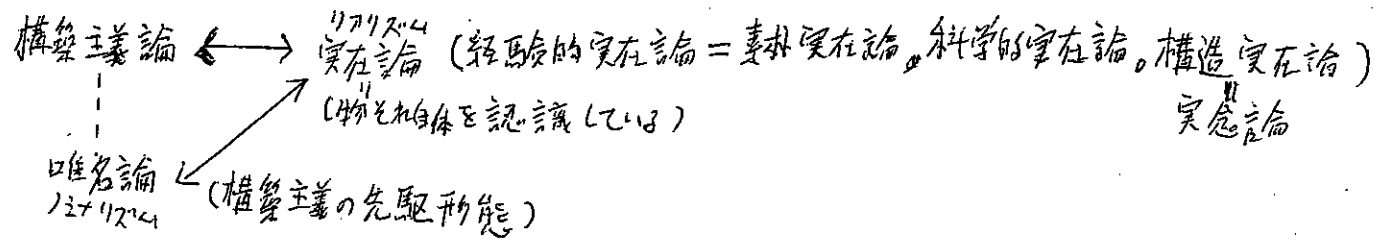


- ② 結論... 科学技術は大切だが、自然科学還元主義(科学の神格化と物理学帝國主義)は誤り。
- 科学史の考元元。(主流の説)(主に物理学がモデル)。(異論、批判も諸説ある)。
- 17世紀 科学革命 - 18世紀 啓蒙主義(聖俗革命) - 19世紀 第二次科学革命(科学の制度化、専門職業化、大学教育、インテリゲンチヤ)
- ↳ 近代・中世的世界像の転換。地球中心・人間尺度命題から → 地動説、科学尺度命題へ(近代にも地球中心)
- 世界は「冷たい家銀(宇宙)」となる。(17世紀以降「無限の空間の永遠の沈黙」が、私をおののかせた)
- (後には近代的ニヒリズムへ... すべては無意味、空虚。特に人間の存在、生きることには意味も価値もない。)
- 近代の世界像(カント) → 「物理学的客観主義」と「超越論的主観主義」の相互対立的補完の図式。
- 16Cアメリカとの遭遇 → 「対称性人類学」の可能性 (P148)
- 外から世界(主存在)を眺めることはできない。(眺める視点、人間(主体)も世界の一部であり、世界のなかにあるから)。

1. 自然主義 (P152) - 「自然科学の領域へと還元されるものだけが存在し、それ以外は幻想」を批判。(P154)
  - 地球形成と進化前説 - 検証できないので議論しと存在しない (P155)
  - 新しい無神論... 宗教は科学的世界像の敵である。
  - 創造論 - キリスト教原理主義(根本主義、カークパトリック)より19Cアメリカのフレイザンティズムのなかで生じた。
  - 創造論はドイツでは何の役割もしていない (P157)。創造論と宗教現象一般と同じとみてはいけな。

2. 一元論 (P158) - 唯物論的一元論
  - 私を私を構成している素粒子と同じではない (P162)。 - ても素粒子=身体)の権威、要素としては私には存在しない
  - 素粒子の構成のあり方、構造のあり方、また「創り出し」の問題か?。心身問題ともからむ。
  - クワインの批判 (P164)。 - 「認識は物質的反応のプロセスである」を批判。

3. 世界という番物 (P164) - (構築主義の問題点)



- 新しい實在論 (P169) - { 物および、事実それ自体を認識できる, 物や事実それ自体は、唯一の対象領域にだけ属しているわけではない。 }  
 〃  
 競技の場の存在論である。
- 心的表象主義と感覚生理学的な知覚と幻覚(虚像)との区別ができていない (P173)。(知覚と幻覚も等しく明確に区別できず場合と、あいまいな場合がある)。
- (自然科学的世界も心的世界もどちらも構築主義的現象(幻想)であって、同等という考えもある)
- (構築的實在、世界像も人間(主体)が認識(構築)する。 - 但し、個人的主観ではなく、共同の主観)
- 超越論的主観が構築する(カント的)。その他にも領域、自認(例えは心の領域も自然(宇宙)の領域)
- 私の左手は、その時々で違った仕方で現象することとは別に存在するわけではない。物それ自体が様々な仕方で現象する。(P175)
- カントの不条理な結論を批判 (P176) - 物それ自体は時空間にはない。私々のなかにはあるが、そこに場所の規定。また私々は時間的存在物ではないから。

4 主観的真理 (P177) ~ (主観的述語とは特定の共同体に属する者によっての主体が用いる述語)  
 ・おいては文化的、歴史的構築物で、物それ自体を記述するのは、自然科学だという考えは正しいか?  
 ・人文科学が文化的構築物を扱った対象とすれば、真/偽の区別が薄らぐ。解釈は恣意的な幻想に落ちる。  
 ・サッサーにはある。新しい実在論と構築主義は両立する (P178) 批判  
 ◎構築物・幻想・恣意: 真理には数多くの亜種があり → 構築主義はそれを単純化して、Aの産物、言語的・社会的・経済的要因の産物として説明するの誤りである。→ 新しい実在論は主観的真理も存在すると想定する (P183)

5. 拙作 (とまひち) (P184) ~ 事実 (何かについて「真である」といえる何かのこと) P310。存在 (意味や場の性質と意味の場は何か現実(ている)という) P309。事実性 (ある何かが存在している状態) P310  
 ・構造されたものでない、さまざま事実を構築主義も必要としている (P186)  
 ・おいてが相対的だ → 果てしなく事実の入り子状態に陥いる (P188)。窟に落ち、  
 ・実在論の各で、特定の事実を特権化することは本義にない (P190)

6. 科学と芸術 (P191) ~  
 ・現代芸術は科学的な世界観に抵抗する (P193)。芸術作品の理解は恣意的でなく自由である (P194)  
 ・19世紀ドイツ観念論は「意味(理解されず)」を精神と呼んだ (P195)。精神は単に心理的・主観的の存在ではなく、人間による理解における意味の次元である。→ 人文科学。芸術の解釈、人間世界の理解は自然の理解と違った種類のものがある (P196)。一本堂か、挿入は正しいのか? トムセンバルク「自然科学と芸術の両プロセスはそれぞれ異なるものでは無い」  
 ◎「~~自然~~人間言語をつくってきた」

◎参考、補足  
 ・19世紀科学革命論に批判的言説もあり (連続言説)。トマンの科学革命にも批判は付けられる。ヒルシュの存続可能性についても、測定技術のレベルによって左右される。(例、ガリレオの年周視差、ラウレンツェの質量保存、アインシュタインの相対性理論など)  
 ・古代、アリストテレス(484)地動説(世界の中心は地球)前30。エラトステネス(276)地球の周長測定、素数数論のツェーデル、ケプラー(1571)前60幾何学的神学批判(馬や牛の神の学)、ポトレマイオス20天動説

◎近代科学の系譜 (17-2) ← 東ローマ帝国(ビザンツ帝国) → 西ローマ帝国、修道院 → 12世紀初め、スコラ学、大学 → 17世紀初め → 19世紀科学  
 ↳ 欠陥、電同  
 ↳ 一般に知られる近代科学(者)のイデオロギイは19世紀に成立。(イデオロギイは20世紀のネオ冷戦構造で保たれたという言説あり) (但し、17世紀にも及ぶものあり、19世紀の科学者もいた)  
 ・生物 → 1665ミクロスコピー人体解剖、17世紀ミクロスコピー、18世紀リンネ生物分類、19世紀細菌学、20世紀遺伝学、DNA分子生物学  
 ・18世紀化学革命、ラウレンツェ(ボロンの熱学) 質量保存、燃焼理論、18世紀、蓋然性、20世紀、相対性理論、量子力学(ヒルベルトの)  
 ・物理 19世紀電磁気学、マクスウェル、熱力学、統計力学、20世紀相対性理論、量子力学(ヒルベルトの)

数学 17世紀ガリレオ、デカルト、ニュートン、ライプニッツ (微積分) 18世紀カント、19世紀ガウス、コッシー、20世紀ヒルベルト、リーマン  
 ↳ 実無限 (無限集合論) 不完全性定理  
 ↳ 19世紀カント、集合論、実無限 (無限集合論)  
 ↳ 20世紀ヒルベルト (有限性)、不完全性定理  
 ↳ 17-18世紀、蓋然性、相対性理論、量子力学